

健康文化

時の色

高田 健三

最近、絶えて映画館に行ったことがない。映画は嫌いではないが、見る気を誘うような作品が見当たらないことと、時々、テレビで往年の「名作」を放映するので、それですましてしまうからであろう。しかし本当はサラウンド効果の効いた大画面迫力は映画館でないと味わえない。暇がないといえば嘘になるが、行かない最大の理由は、上映時間に合わせて出かけるのが煩わしいのである。コンサートや歌舞伎などと違って、午前10時頃から1日に何回も繰り返し上映されているので、次回との間の休憩時間は10分ほどしかない。少し早目に行けば行くで、ストーリーの結末を先に見てしまうことになり、これほど味気ないものもない。それがラブ・ロマンスにしても然り、ましてやサスペンスものに到っては、大団円を先に見てしまえばサスペンスではなくなってしまう。中には、犯人と犯行の現場を先に見せて、それを名探偵が何如に詰めて行くかを見せる倒叙劇もあるが、それはそれなりに筋の運び方が違って面白ものである。

前回の上映が終わるのをロビーで待つにしても、これほど殺風景な場所もない。映画館ではロビーといっても通路を少し広げたようなもので、いくつかのソファが置いてあるだけで、売店があればましな方である。売店といえば、アメリカの映画館では必ずといってよいほど、ポップコーンを売っていて、これをまた、皆がよく買うのである。座席で食べていても、日本の煎餅のようなパリパリという音がしないのがよい。年中行事のカウンティ・フェアなどでもポップコーンと綿菓子付き物で、アメリカの庶民生活を代表するものの一つなのである。さしずめ日本の縁日ならば、焼きそばに焼きトウモロコシといったところであろうか。待つ間仮にポップコーンを食べるとしても、日本人は様にならない。あれは無造作に掴んでぱっと口に放り込むものである。これは日本人に真似のできない仕草の一つである。

今と違って娯楽の少なかった頃は、手軽な娯楽として映画館はどこも人で溢れていた。座れなくて最後まで立って見たという、今の人には信じられないようなこともあった。それ程までして見に行ったもう一つの理由は、最近のもの

より秀作、傑作が多かったことである。万事につけ忙しくなった世相を反映してか、今ではロマンスのジャンルに入る作品でも「直情的」で「情緒」が少なくなっただけのように思える。映画というものの持つ本質でもあるが、映画館の雰囲気自体、何となく人を追い立てるような気がして落ち着かない。これがコンサートホールや、オペラ劇場ともなると、ぐっと雰囲気が変わってくる。ポップコーンは姿を消し、それに代わってカクテルラウンジなどが整っていて、社交場の優雅さが漂う。そしていつも思うことであるが、そこでは何故か時間がゆっくり流れているのである。

1960年代はじめの頃、サンフランシスコのオペラ座にコンサートを聞きによく出かけたものである。我々の常席は天井桟敷であったが、開演前や休憩時間に、玄関ホールの吹き抜けから一階フロアを見下ろすと、そこに群がる燕尾服やイヴニングドレスに身を包んだ「紳士・淑女」達が、スローモーション映画を見るように動いていたことを憶えている。映画館のような喧噪もなく、子どもの頃、親に連れられて見たサイレント映画のようであった。

昔の映画といえば、勿論モノクローム（白黒）であったし、テレビは我が国では1960年にカラー放映が始まるまでは白黒であった。映画もテレビも殆ど総ての作品がカラー化されてからは、白黒作品を見るのが稀になったが、カラー映画の中で、過去を追想するフラッシュバックの場面では、しばしばモノクロの画面が用いられる。それも単なる「白黒」ではなく「セピア」調の色調が多い。過去という時間を何故か我々はセピア色の中に感じ取るのである。どちらが先かは知らないが、外国映画にも同じ手法が使われことを思うと、これには洋の東西で違いはないようである。もともとイカの墨から作られた絵の具といわれるが、暗褐色の色調が何故そういう効果を持つのだろうか。

かつて、人間社会の記録は、もっぱら絵画の仕事であったのだが、1839年、フランスのダゲールが写真術を世に発表して以来、写真は急速に普及し、記録や情報伝達の主役にのし上がってきた。そのおかげで、1858年の日米修好通商条約締結の歴史的光景や、江戸末期から明治にかけて生きた現代日本の先達たちの風貌を見ることができるようである。我々の家庭によくある「古き時代」のアルバムを開くと、自分の子どもの頃や家族の写真に、過ぎ去った時代を思い出すことは誰しも経験することである。そんな時、殆どの場合、アルバムの写真が暗褐色（セピア色）に変色しているのを経験したことがあるはずである。ハイポの抜けが悪い場合もあるだろうが、感光剤の臭化銀自体の経時的化学変化によるものらしい。いずれにしても、そうしたことから、我々の頭の中にはセピア色に変化した写真は古い時代のものであるという思いが、既成概念にな

ってしまったのであろう。だから、その色調から過ぎ去りし時を感じてしまうことになる。セピア色は過去を現す色なのである。皮肉な言い方をすれば写真技術の欠陥が期せずしてつくり出した新しい感覚の世界というべきか。映画のフラッシュバックにこの色調を初めて使ったカメラマンは素晴らしい感覚の持ち主だったに違いない。

アメリカ西部には、1849年頃のゴールドラッシュの名残を留めるモニュメントがあちらこちらにあって、今の繁栄から忘れられたものも少なくない。そういう場所に立つと寂莫とした空気の中にかつての喧噪が聞こえてくるようで、私の好きなスポットの一つである。ネバダ州北部にあるゴーストタウンはそんな場所の一つである。かつてはジョン・フォードの傑作“駅馬車”に出てくるような町だったのであろうか。西部劇でお馴染みの板張りの歩道がある煤けた町並みは、そこだけ時間が止まったようなたたずまいを見せていた。

道の両側に20軒ほどある店は細々と観光客相手の商売をしているようであった。一軒の扉を押し開けると、こまごまとしたスーベニアの並べられた棚の奥に老婆の顔が見えた。小物を一つ買って札を出すと、ジャラジャラと都会では珍しかった大型の1ドル銀貨でお釣りをくれた。見ると1800年代のものが混じっていて、コイン収集に興味があるわけではないが、我々が珍しがると、手持ちの中から古い年号のものを探してくれた。出がけに、冗談に昔の弾痕が残っている所があるかと聞くと、表通りを歩いてごらん、目がよければ、歩道の柱に見つかるかもと言って、いたずらっぽく片目を瞑って見せた。

灰色の町の“大通り”を見通す先には、かつてこの町の繁栄を支えた銅山が、今は廃鉱となって灰褐色の肌を覗かせていた。それは恰も古い写真を見ているような気がした。ずっと後になって、それがセピア調の景色のせいなのだと気づいたことであった。過去の町に相応しい色であった。しかし、あの老婆のようなユーモアのある人達によって、あの町はこの先も“ゴーストタウン”として変わらずのまま生き続けることだろう。

先頃、必要があって久々にスタジオを訪ねた折に、写真技師から聞いた話であるが、肖像写真も最近はカラーが多いが、中にはモノクロを注文する人も結構あるという。そんな時に、セピア色のプリントをすすめることもしているらしい。この色調は重厚な風格を持っているからだというのが理由であった。そういえば、家具、壁紙、カーテンなどのインテリアも、ブラウン系は、豪華で落ち着いた雰囲気を出す色調であるといわれる。待合室の壁に展示してあった、カラー、モノクロなど数多くの写真の中で、セピア色の“人物”は周囲と違ったある種の存在感を持って私を見ていた。私もプリントを頼みに来たのだが、

体格に自信のない私には大変魅力的であった。しかし、ふっと思ったことは、セピア調にすると、その時から過去の人になってしまうような気がして、普通のモノクロを頼むことにした。写真の中でも現在進行形の人間でありたいと思ったからである。

ラ・ヴィ・アン・ローズとは、フランス語を習ったことのない日本人でも、意味の分かる言葉である。若い人、特に女性は誰しも「バラ色の人生」を一度は夢見るものであろう。「バラ色」とは、辞書によると「うすべに色」（ピンク）を指し、明るく楽しい幸せという意味を持つとある。バラの花には、赤、黄、白、紫など多種多様な色調があるが、うすべに色のバラ色はそんな願望を託す未来の色なのである。もっとも最近の若い人達の間には、即物的思考が強く、バラの色に例えれば、まばゆいばかりのスカレット色で自らをアピールする人生を指向している人が多いように私には思える。ラ・ヴィ・アン・ローズの中味も時代とともに変わろうというものである。

ここ10年ほど、バラを育てていたが、一頃40ほどあった株も、今は10株ほどを残すのみとなった。虫がついたり病気になったりで、育てるのに手のかかる花である。特に白やピンクの淡色系の花は、ハナムグリ、ゾウムシやスリップス類の害虫に襲われて、蕾から台無しになってしまうことが多い。バラ色の人生を手に入れるのには、育てることから始めなければ、おいそれとは行かないものと覚悟してかかるべきである。

「過去」がセピア色で「未来」がバラ色とすると、「今」は何色で表せるのだろうか。アメリカでは、週末遊び疲れてまた仕事の始まる憂鬱な月曜日をブルーマンデーという。イギリスの学生用語では、夏休み明けの月曜日はブラックマンデーというそうである。アメリカのそれになぞらえていうならば、ゴールデンウィーク明けの今、日本のサラリーマン家庭はブルーウィークの最中（さなか）ということになるだろうか。

(名古屋大学名誉教授)